

2026 年（令和 8 年）度 一般入学試験 B 日程問題

2 教科方式

注 意 事 項

- (1) 試験開始の合図があるまで問題用紙を開かないでください。
- (2) 試験時間は 60 分です。
- (3) 試験問題は、日本史が日 1～日 11 ページ、世界史が世 1～世 12 ページ、数学が数 1～数 9 ページ、国語が国 1～国 24 ページまであります。なお、国語は裏表紙からはじまります。
- (4) 試験中に問題用紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
- (5) マーク解答用紙に座席番号、氏名を記入してください。なお、「選択科目」のマーク解答用紙の受験科目欄に、受験する科目を 1 つだけマークしてください。
- (6) 解答は各問の指示に従って、マーク解答用紙の解答欄にマークしてください。
- (7) 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

※マーク解答用紙の受験科目欄に、受験する科目のマークを忘れずに記入してください。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

本書で「魂」と訳されるのは、「プシューケー」(psyche)というギリシア語である。現在では、たとえば英語の「心理学」psychology、「精神分析」psychoanalysisなどの言葉の一部分となっていて、「心」「精神」の意味で使われている。

①この古代ギリシア語は、そうした「精神的な」意味にかぎらず、もっと広い意味で使用されていた。最古の用例を見出せるのは叙事詩作家ホメロスの作『イリアス』であるが、そこでは死とともに人の肢体から去ってゆく霊とか、冥界に彷徨う人の影のような②亡霊的存在を意味している。こうした用例では、人間の心のはたらきや精神状態との直接的なかわりは見出されない。

その後この言葉は、徐々にその意味を拡大し、こんにちの分類では認識や感情、欲求などのはたらきもその手中に収め、われわれの言うところの「心」のはたらきとのかかわりを強めていく。それでも、この語は使用のなかに、濃淡の差はあれ、「いのち」あるいは「生きること」と何らかのかかわりを保持し続けていた。そのため、この言葉から派生した形容詞「エンプシュコン」は、「魂をもつ」ことを意味するが、その初期の用例からほぼ「生きている」という意味で使用されている。

A

それゆえ古代ギリシアでは、魂は、植物にも人間以外の動物にも宿ると考えられていた(ストア派^{注1}のように植物には魂を認めないという例外的な立場もあるけれども、それはこの論者たちの一つの哲学的な見解である)。

③アリストテレス^{注2}の自然学的知の構想のなかに、動植物についての考察に先だって、『魂について』および感覚や記憶、夢などについて論じた『自然学小論集』が含まれると考えられるのも、このためである。事実彼は、『魂について』の冒頭で、「魂を知ることとは、真理の全体にとっても貢献するところは大きいが、とりわけ自然の研究に対して資するところは最大であると思われる。なぜなら、魂は生物(動物)の始原(原理)に相当するものだからである」(『魂について』第一巻第一章 402a4-7)と宣言している。

生命活動全体を蔽^{おほ}う魂の概念が、心の概念と異なることは明らかだろう。それでも、アリストテレスの魂をめぐる考察が心をめぐる議論でも参照さ^④れるのは、動物の一員である人間の魂の活動に、感覚知覚や思考といった、こんにちで言う心的現象が含まれるからにはかならない。

アリストテレスは魂の探究に際しても、その考察の手續きについて意識的で、『魂について』の冒頭でこれを詳しく論じている。実際の考察は、まず全体的な定義を与えたうえで、さらにより立ち入った定義を与えるというかたちで進む。

「最も共通的」とされる最初の規定によれば、魂は自然的な物体（身体）の形相、あるいは自然的物体の第一次の終極実現状態（エンテレケイア）として規定される。魂がノギリの切断機能にたとえられていることが示すように、魂は自然的な物体（身体）のもつ本質的な機能ないし能力である。そして魂と身体とは、蠟^{ろう}とそこに押された形の関係にたとえられ、素材と形相の関係にある。ア、両者が相関関係にあることから「魂と身体が一つであるかどうかを探究する必要がない」（『魂について』第二巻第一章 412b6）のである。

身体に実現するはたらきの一つという魂のとらえ方は、デカルト的な精神と物体の二元論に対比されて、二〇世紀以降には心身一元論の主張として（好意的に）解釈されてきた。さらに踏み込んで、アリストテレスは心身一元論のうちの特定の理論、たとえば機能主義の先駆者と評価されたりもした。機能主義とは、心がある特定の状態にあることを、身体ないし物体の因果的な機能（ファンクション）として理解する立場である。イ、ある感覚刺

激という入力に対して、特定の行動という出力を導く一種の関数（ファンクション）として心の状態を考えるのだ。ノギリとその機能の関係が身体と魂との関係と類比的であるというアリストテレスの議論は、この機能主義的な解釈に一定の支持を与えるようにみえる——もしも、魂のはたらきが心のはたらきとして考えられるとすれば。

だが、^⑤このようにアリストテレスの見解を現代的な心の理論と重ねることには、大きな困難がある。心と身体（物体）の両方の概念について、アリストテレスとわれわれとの間には、より基本的な見解の相違があるからだ。そしてこの点が、近代以後の心の概念を前提とした諸理論の枠内には収まらない、アリストテレスの魂論の最大の

特質でもある。

アリストテレスは、以上の一般的で共通的な魂の規定からさらに分析を進め、彼が「魂の最も本来固有の説明規定（定義）」と呼ぶもう一つの規定を提出している。それは、魂とは、栄養摂取、運動、感覚知覚、思考というそれぞれの能力であるという規定である。この定義を支えるのは、魂が生きていることの原理であり、しかし植物と動物、そして人間とではその「生き方」が異なるという洞察である。植物は栄養を摂取して生きるが、動物は運動と感覚知覚をおこない、人間は思考することができる。たとえ^⑥休むことに似た「下手な考え」であつても、人間は多くの時間を思考をめぐらして生きているのだ。このように、それぞれの生の形式は異なる。

われわれは、生きるということを、生命の維持、つまり^⑦アリストテレスの言う栄養摂取のはたらきとしてまず考えるであろう。じつさいのところ、感覚したり考えたりすることも、栄養摂取ないし新陳代謝活動がなければ不可能である。したがって、こうした魂の諸能力は、一つの能力を基礎として次の能力が成立するという、ある階層的な構造をもっている。まず植物をはじめとしてすべての生物は、栄養となるものを摂取することによって生き延びることができるので、栄養摂取能力は最も基層にある能力であり、すべての魂をもつもの（生物）にそなわる。植物にはこの能力が帰されるだけだが、動物においては他の諸能力がこの能力を基礎として成立し、それらの諸能力の間にも階層関係が成立する。さらに、人間の生きるという営みには思考する活動が含まれるので、その魂には思考能力が含まれるが、同時にこの能力の基礎となる栄養摂取、感覚知覚、運動の各能力もそなわっている。

しかし、同時に次のことも確認しなければならない。アリストテレスにとって、栄養摂取だけでなく、運動、感覚知覚、そして思考も、それぞれが生形式であり、生きる能力の発現のかたちなのだ。アリストテレスは、栄養摂取や新陳代謝の活動だけを「生きる」ことのかたちだと限定していない。

ウ

、生のこうした理解の仕方から脱却することを求めているとも言える。彼は知性、感覚知覚、場所的運動、そして栄養摂取のうちの「どれか一つがそなわっているとすれば、それだけでわれわれはそれを「生きている」と語る」と主張する（『魂について』第二卷第二章 413a22-24）。感覚知覚や抽象的な思考も、生きることに余剰的に加えられる活動ではなく、生きるこ

との一つの形式である。走ることや痛みを感じることはもちろん、暮の次の手を考えることも、どのように生きるべきか悩むことさえも、「生きる」あるいは「生きている」ことをそれぞれの仕方で表現しているのだ。

われわれは、しかし、もはやこうした魂の概念を通して世界を見ていない。われわれはそれにかわって心という概念をもち、それによって世界を切り分けている（その経緯については、間もなく顧みたいと思う）。栄養摂取は身体の活動であり、思考は心のはたらきである、というように。

われわれがアリストテレス的な魂の概念を理解するためには、失われた思考の方向感覚を覚醒させなければならぬ。その試金石となるのは、心という仕切りによってその外と内に分けられた栄養摂取と感覚知覚を、同じ概念の傘の下に入れて同じように考えることができるかどうかである。あなたは、朝、パンを頬張りながら、携帯の天気予報を確認しているかもしれない。この二つの活動、つまり栄養を取ることと携帯を見ることを、魂の活動として同様に考えるのだ。——そう考えることが、アリストテレスのような仕方で考えることである。そのためには、心のはたらきについての一般的な見方を大きく変更しなければならない。

第一に、栄養摂取も感覚知覚も、たんなる物理的過程ではない。感覚知覚が栄養摂取と並行的であることは、感覚知覚を、身体Ⅱ物体のプロセスないし物理的に記述される出来事として理解することではない。そもそも栄養摂取という活動もまた、物体内のたんなる因果的過程ではなく、生きることの一つのかたちとしての意味や役割をもっている。たとえば、食物という対象も、そして食べるという行為も、摂取・消化し人間の成長や健康、生存を担うという連関のなかではじめて成立する。

アリストテレスの哲学を現代に蘇^{よみがえ}らせている哲学者の一人である^⑧マイケル・トンブソンの奇妙なサメの例はこのことを物語る。多くのサメとは異なり、想像上のある特異なサメは、小魚などではなく、水中のプランクトンによって栄養を摂取するので、このサメは海水を濾^ろ過^かしプランクトンを取り出す身体のしくみをそなえている。他方でこのサメも、他のサメと同じように、小魚を追いかけ、口から体内に取り入れるが、その小魚はぐちゃぐちゃの混合物になって、他の捕食動物が寄ってきたときにそれを追い払うために吐き出されるのである。このサメが小

魚を追いかけて飲み込む行動は、他のサメが何かを「食べる」場合の動きによく似ている。近づく、口を開ける、噛むという動作自体は、同じと言ってよい。しかしそれは「食べる」ことではない。飲み込んだものが、消化され血中に取り入れられたり、身体の一部になったりしていないからである。これに対して、「食べる」という行為は、たんなる物理的で因果的なプロセスではない。それは、栄養摂取という、有機体全体の生き方の一部となりそれに貢献する活動という意味をもつことによって、はじめて行為として特定され理解される。感覚知覚もまた、動物や人間の生き方の一部となりそれに貢献する活動として特定され理解されるのである。

栄養摂取も感覚知覚も、このような意味で、生きるための活動であり、生きることの表現である。とすれば、その営みにとって主体の置かれた環境ないし外的な世界との適切な関係は本質的である。栄養摂取においては、そのことは明白だ。それは生物がその環境に存在する自身の生存に役立つものを、摂取し消化し血肉化するという仕方で受容する活動である。感覚知覚も、これと I に考えられる。すなわち感覚知覚は、動物が周囲の世界が提供する知覚情報を、認知するというかたちで受容する活動である。

（中畑正志『アリストテレスの哲学』より）

※出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある。

注1 ストア派：古代ギリシアの哲学の一派。

注2 アリストテレス：古代ギリシアの哲学者（前三八四～前三二二）。

問一 傍線部①「この古代ギリシア語」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

解答番号は1。(5点)

- a 最古の用例での霊や亡霊的存在から、現代での「心」「精神」まで、総じて生にかかわる意味合いをもっている。
- b 最古の用例では人間の心や精神にかかわる意味はなく、「いのち」や「生きること」という意味合いに限られた。
- c 霊や亡霊的存在という最古の用例にも表れているように、「いのち」や「生きること」と関連が深い言葉である。
- d 最古の用例における芯となる意味合いが、「エンプシユコン」という派生語のなかにもはつきりと残っている。
- e 最古の用例のなかですでに、その意味が認識や感情、欲求という意味にまで拡大していく萌芽もうががみられていた。

問二 傍線部②に関連して、巫女みこによって呼び出された亡霊の語りが含まれる『藪やぶの中』を著した小説家を次の中から一人選びなさい。解答番号は2。(3点)

- a 北原白秋
- b 菊池寛
- c 芥川龍之介
- d 久米正雄
- e 夏目漱石

問三 空白部 A に入る文として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は3。(3点)

- a 「魂」と訳されるこの言葉は、生命活動、あるいは死の原理という意味をその核にもっていた。
- b 「魂」と訳されるこの言葉は、生きることの源、あるいは生の原理という意味をその芯にもっていた。
- c 「魂」と訳されるこの言葉は、認識や感情、あるいは欲求の原理という意味をその核にもっていた。
- d 「魂」の語源でもあるこの言葉は、人の源、あるいは感情の原理という意味をその芯にもっていた。
- e 「魂」の語源でもあるこの言葉は、心の源、あるいは認識の原理という意味をその核にもっていた。

問四 傍線部③「アリストテレスの自然学的知の構想」の説明として、あてはまらないものを次の中から一つ選び

なさい。解答番号は4。(5点)

- a 魂について知ることを、自然を理解するための重要な過程として位置づけていた。
- b 古代ギリシアにおける、動植物に魂が宿ると考える自然観の枠組みのなかで理解することができる。
- c 生物について知り、自然を研究することを、真理を知るという行為の一部としてとらえている。
- d 動植物の考察にあたり、魂や感覚、記憶、夢についての考察を先に行ったと見なされている。
- e 生物の原理を通して魂を知ること、真理の全体像に到達することができると考えている。

問五 傍線部④「れる」と同じ品詞・用法のものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

解答番号は5。(3点)

- a アルバムを見ると昔のことが思い出される。
- b まさか富士山に登れるとは思っていなかった。
- c 両親が新郎新婦から花束を贈られる。
- d 彼は夕方以降なら来られるそうだ。
- e 先生が黒板に美しい文字を書かれる。

問六 空白部 ア ウ には、文をつなぐ言葉が入る。その組み合わせとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は6。(5点)

e	d	c	b	a	
したがって	ちなみに	一方で	ところが	だから	ア
たとえば	ところで	すなわち	要するに	しかし	イ
むしろ	それでも	なお	逆に	ちなみに	ウ

問七 傍線部⑤「このようにアリストテレスの見解を現代的な心の理論と重ねること」とあるが、どういうことか。その説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は7。（5点）

- a 魂を形相、身体を素材として両者の相関関係を説明するアリストテレスの見解を、身体の状態を心の機能としてとらえる理論のなかに組み込むこと。
- b 魂と身体の相関関係そのものを人間の本質的な機能ないしは能力としてとらえるアリストテレスの見解を、心身二元論的な理論のなかに取り入れること。
- c 魂と身体の区分にとらわれずに生物の能力を分類するアリストテレスの見解を、心の状態を身体の機能としてとらえる理論を支持するものと考えること。

d 魂を身体がもつ本質的な機能ないしは能力としてとらえるアリストテレスの見解を、心の状態を身体機能としてとらえる理論と親和的であるとみなすこと。

e 魂と身体を一体的なものとしてとらえるアリストテレスの見解が、身体機能を心の状態の形相としてとらえる理論を補強していると考えること。

問八 傍線部⑥の元になっている「下手の考え休むに似たり」ということわざの意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は8。（3点）

- a 下手な人は考えるより先に行動するべきだ。
- b 下手な人が長時間考えている様は見苦しい。
- c 下手な人ほど休むことしか考えていないものだ。
- d 下手な人の考えでも何もしないよりはましだ。
- e 下手な人が長時間考えても時間の無駄だ。

問九 傍線部⑦「アリストテレスの言う栄養摂取のはたらき」とあるが、その説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は9。(5点)

- a すべての魂をもつものにある最も基礎的な能力であり、新陳代謝活動の基礎になることで他の諸能力を支えている。
- b すべての魂をもつものにある最も基礎的な能力であり、生命活動の前提となる身体の活動として魂の活動と区別される概念である。
- c すべての魂をもつものにある生命を維持するための能力であり、動物・人間の諸能力の階層構造の基礎にもなっている。
- d すべての魂をもつものにある最も基礎的な能力であり、植物と動物にはこの能力のみがそなわっているとされる。
- e すべての魂をもつものにある生命を維持するための能力であり、人間においては魂の諸能力のなかで最も重要な地位を占めている。

問十 傍線部⑧「マイケル・トンプソンの奇妙なサメの例」とあるが、筆者がこの例を通じて説明している内容として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は10。(5点)

a 「食べる」という行為と異なり、感覚知覚は動物や人間の生き方に貢献する活動として特定されることではじめて理解できるということ。

b 「食べる」という行為と同様に、感覚知覚も有機体の物理的で因果的なプロセスとして特定されることではじめて理解できるということ。

c 「食べる」という行為と異なり、感覚知覚は動物や人間に特有の身体のしくみを支える活動として特定されることではじめて理解できるということ。

d 「食べる」という行為と同様に、感覚知覚も有機体の生き方に貢献する活動として特定されることではじめて理解できるということ。

e 「食べる」という行為と異なり、感覚知覚は有機体の物理的で因果的なプロセスとして特定されることではじめて理解できるということ。

問十一 空白部 I に入る語として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は11。(3点)

a 対照的 b 横断的 c 並行的 d 相互的 e 付帶的

問十二 本文の内容として、もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は12。(5点)

a アリストテレスの魂に関する考察は心的現象に留まらず、植物・動物・人間の生の形式の違いに着眼しつつ魂を生る原理ととらえ、現代では心あるいは身体的活動として区別される概念とともに魂の活動とみなしている。

b 身体と魂との間に道具とその機能と同様の関係性があるのとらえるアリストテレスの魂に関する考察は、デカルト的な精神と物体の二元論と相対するものであり、心身一元論における機能主義の先駆けとして批判された。

c アリストテレスは知性、感覚知覚、場所的運動、栄養摂取のうちどれか一つがそなわっていれば、抽象的な思考が可能になると主張したが、現代ではこのような考えは一般的ではなく、思考は心のはたらきの一つとみなされている。

d アリストテレスは栄養摂取や感覚知覚を物理的過程として単純化せずに生きることの一部としてとらえており、これに基づく魂の概念では、心という仕切りによって、感覚知覚と栄養摂取を内と外に分けることができる。

e マイケル・トンブソンの奇妙なサメは、その動作の特異性のため、他のサメが何かを「食べる」場合とは一線を画しており、「食べる」という行為は栄養摂取をともなってはじめて有機体の生き方の一部となることを示唆している。

二 次の文章と資料を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

関東大震災から得られた教訓の一つは、国民一人一人の防災意識や、それに基づく「自助」「共助」の取組が、地域の防災力を高める上で不可欠な要素であるという点である。

関東大震災の発生当時から継続的に国民の防災意識や防災の取組状況を把握している調査は無いものの、ここでは、内閣府の世論調査及び消防庁の調査等を基に、昭和後期以降の動向を分析し、今後の課題を検討する。

昭和五九年(一九八四年)九月の「防災に関する世論調査」において、「あなたの家庭では大地震が起こった場合に備えて、何らかの対策を講じていますか、いませんか」という問い(複数回答方式)を初めて実施したところ、「特に何もしていない」という回答が四一・六%に上った(【資料1】)。

その後三回の調査でも国民の防災意識の高まりは見られなかったことから、今から約三〇年前の平成四年版防災白書では、国民の被災体験の有無と防災意識の関係性に触れつつ、次のような考察を行っている。

「関東大震災が発生したとき二〇歳の者は、現在九〇歳になろうとしており、過去の大きな災害の体験はますます風化していくであろう。」

当時の白書はこのように述べた上で、災害映像や起震車^注等の積極的利用によって擬似的に災害体験を積むことの必要性を論じていた。

このような①国民の防災意識の傾向が大きく変わる契機となったのは、阪神・淡路大震災(平成七年(一九九五年))の発生である。同震災の発生から間もない平成七年九月に実施した世論調査では、「特に何もしていない」は二六・三%まで急減した。

また、具体的な「自助」の取組の実施率をみると、「家具等の固定」が六・八%から一二・七%(昭和五九年と平成七年の比較)、「食料や水の備蓄」が一・四%から二三・三%(昭和六二年(一九八七年)と平成七年の比

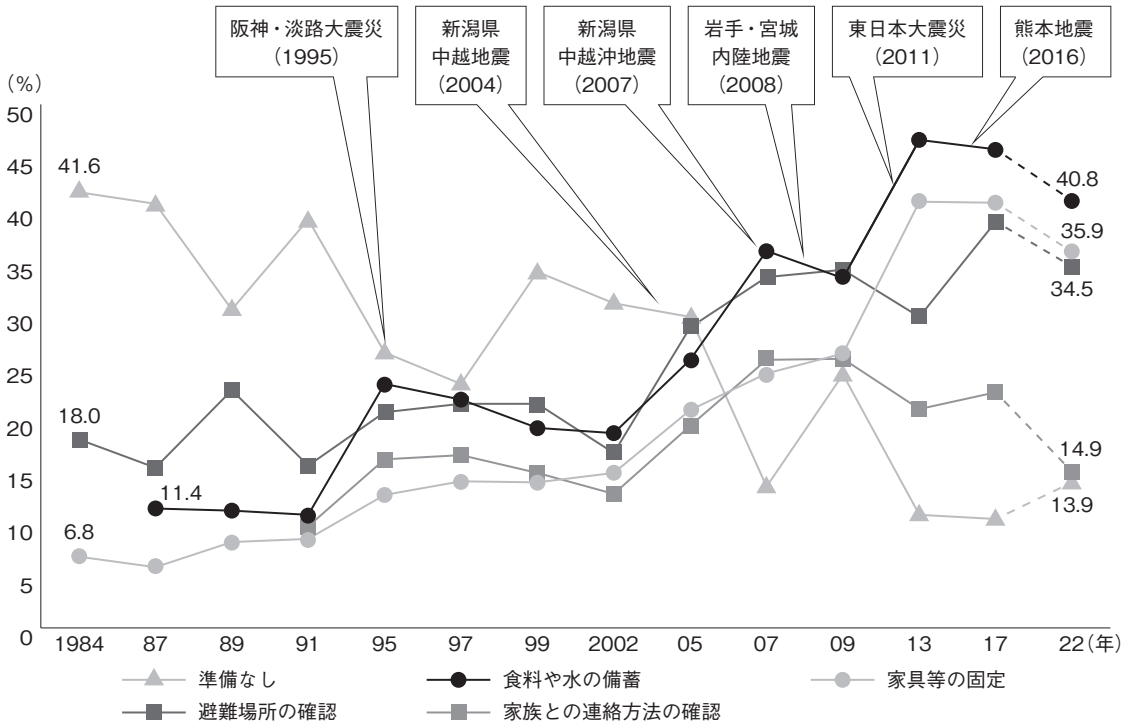
較）と、それぞれ大きく上昇した。このことは、阪神・淡路大震災において、死者の死因の大半が家具の転倒等による圧迫死であったことや、発災直後の避難所では食料・物資の量が圧倒的に不足したなどの事実が知られたことが要因になっていると考えられる。

阪神・淡路大震災以降も、平成一六年（二〇〇四年）新潟県中越地震、平成一九年（二〇〇七年）新潟県中越沖地震、平成二〇年（二〇〇八年）岩手・宮城内陸地震など、平成時代の中期には各地で地震災害が相次いだ。

平成七年の世論調査以降、東日本大震災（平成二三年（二〇一一年））発生までの間に、計六回の世論調査を実施しているが、この間、「家具等の固定」が一・七％から二六・二％（平成七年（一九九五年）と平成二一年（二〇〇九年）の比較）、「食料や水の備蓄」が二・三・三％から三三・四％（同）、「避難場所の確認」が二〇・六％から三四・二％（同）、「家族との連絡方法の確認」が一六・一％から二五・七％（同）と、いずれ

【資料１】大地震に備えた自助の取組に係る選択率の推移

（防災に関する世論調査）



（内閣府「防災に関する世論調査」より）

※2022年度調査は、2017年調査までの個別面接聴取法と異なり郵送法で実施しているため、従前調査との単純比較は行わない。

もおおむね上昇傾向を維持した背景には、このような相次ぐ地震災害を受けた国民の防災意識の高まりがあったと考えられる。

言うまでもなく、東日本大震災（平成二三年（二〇一一年））の発生は、国民の防災意識を一層大きく高めることになり、平成二五年（二〇一三年）の世論調査では、「特に何もしていない」と回答した者が一〇・八%まで低下した。また、具体的な「自助」の取組についても、「家具等の固定」が四〇・七%、「食料や水の備蓄」が四六・六%と、実施率が前回調査よりもそれぞれ一〇ポイント以上上昇した。

ア、東日本大震災後、平成二八年（二〇一六年）に熊本地震が発生し、大きな被害をもたらしたにもかかわらず、その後に実施した平成二九年（二〇一七年）の調査では、例えば「家具等の固定」が四〇・六%となるなど、自助の取組の実施率は頭打ち傾向にある。また、直近の調査である令和四年（二〇二二年）の調査は、それまでの個別面接聴取法と異なり郵送法で実施しているため、従前の調査結果との単純比較はできないものの、総じて取組の実施率は高まっているおそれがある。

近年は、地震災害に加え、台風、豪雨、土砂災害などの風水害が相次いでいるものの、国民による「自助」の取組の実施率が頭打ち傾向にある背景として、多くの国民にとっては報道で見聞きするだけであり、自らが被災者となる実感が得られないことから、災害の発生を契機とした国民の防災意識の高まりが得られにくくなっているとも考えられる。

一方で、令和四年の調査では、「自然災害への対処などを家族や身近な人と話し合ったことがない」と回答した者（全体の三六・九%）に対して、その理由を新たに聞いたところ（複数回答方式）、「身の回りで自然災害が起きたとしても安全だと思うから」や「身の回りで自然災害が起きないと思うから」との回答選択率は少なく、「話し合うきっかけがなかったから」の回答選択率が圧倒的に高かった（五八・一%）。このことから、国民の多くは、自然災害のリスクを認識しているものの、着手の②「一歩を踏み出せない層」が一定程度あることが分かる。

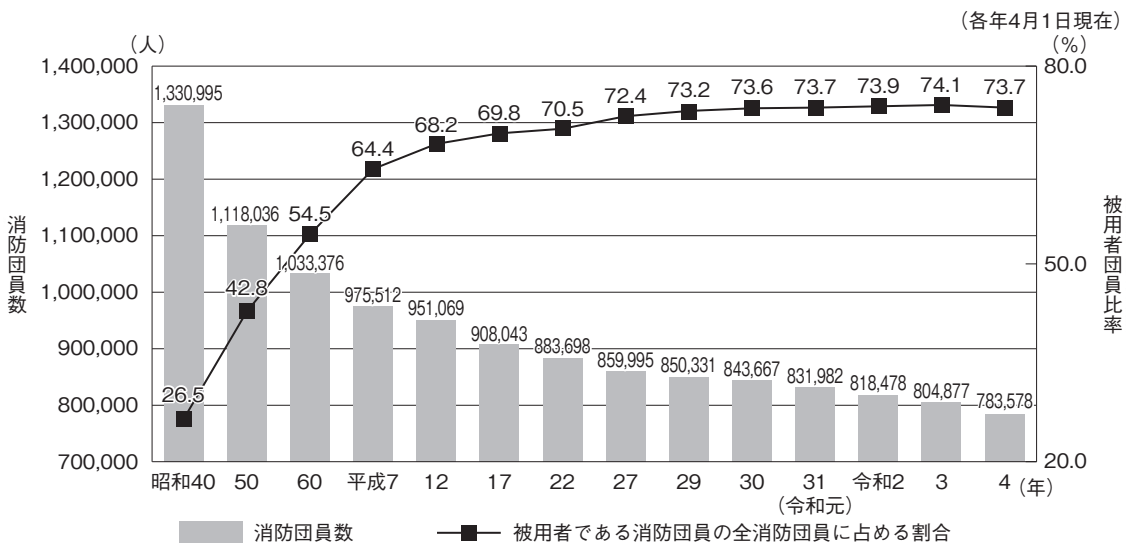
また、令和四年の調査で大地震に備えての対策について、「特に対策は取っていない」と回答した者は、回答者

の一三・九％に当たるが、これを回答者の属性別に見ると、地域別には、東京都区部の居住者では六・四％となっている。また、年齢階層別では一八～二九歳が一七・二％、三〇～三九歳が一七・六％であるのに対して、七〇歳以上では一一・四％となっている。このように、東京都区部の居住者や高齢者層の方が、その他の階層よりも対策を取っている者の割合が高い。このため、このような対象地域や **I** による違いも意識した上で、まだ着手の一歩を踏み出せていない国民層に働きかける取組を強化していくことが求められる。

地域防災力の向上のためには、住民一人一人による「自助」の取組の促進に加えて、「自分たちの地域は自分たちで守る」という意識を持って「共助」の防災活動を行うことが重要である。このため、コミュニティにおける自主的な防災活動を支える自主防災組織の育成が進められており、その組織数及び活動カバー率は年々上昇している。

一方で、地域防災力の中核を成す存在である消防団は、昭和四〇年（一九六五年）には約一三三万人だった団員数が、令和四年（二〇二二年）には約七八万人と、初めて八〇万人を下回った（【資料 2】）。また、団員構成の高齢化も進んでおり、**II**（【資料 3】）、女性や若者等幅広い住民の入団促進や、装備・教育訓練の充実強化に取り組んでいる。

【資料 2】 消防団員数および被用者である消防団員の割合の推移



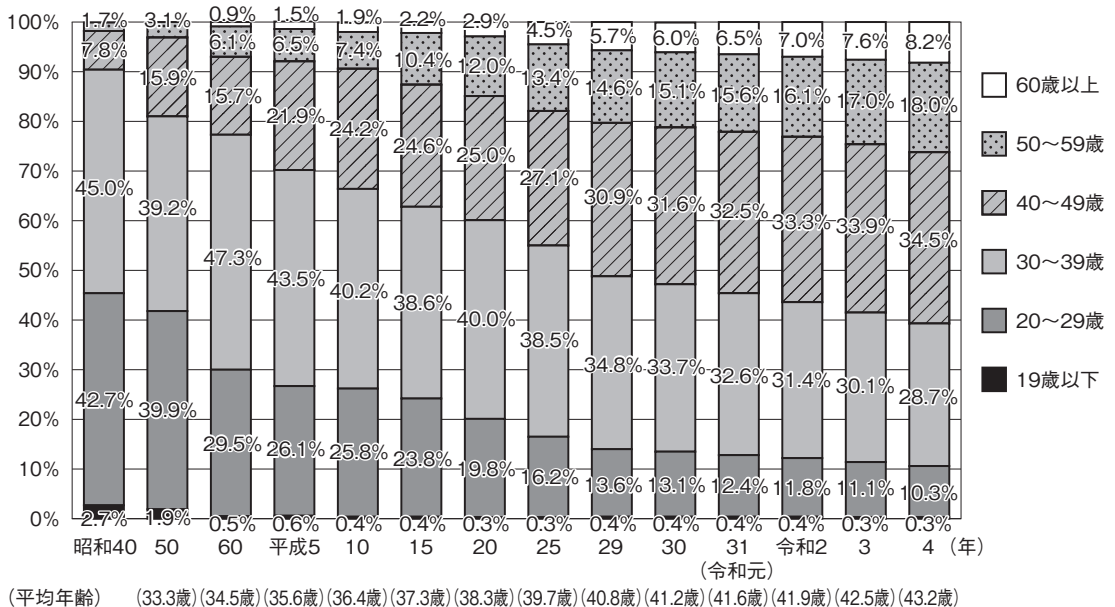
(総務省消防庁「令和4年版 消防白書」より)

「ボランティア元年」といわれ、延べ約一三八万人のボランティアが活動した阪神・淡路大震災（平成七年（一九九五年））以降、災害ボランティアによる支援活動は被災地・被災者にとって欠かせない存在となっている。中越地震（平成一六年（二〇〇四年））等を契機として、全国の社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを運営することが一般化し、個人ボランティアの活動環境が整備された。さらに、東日本大震災（平成二三年（二〇一一年））などを契機として、NPOや企業などの団体によるボランティア活動が活発化し、それらの活動を支援する全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVODA）や県域レベルでの災害中間支援組織の設置が各地で進みつつある。

令和四年の世論調査では、ボランティアを含む被災者・被災地への支援活動の意識調査を行った（複数回答方式）。これによると、「義援金の寄付」（四一・〇％）、「学校、職場、NPOなどの団体が行う災害ボランティア活動に参加」（二三・六％）、「災害ボランティア活動に個人として参加」（一九・九％）等に並んで、「復興を支援するための被災地への旅行や地場産品の購入」（三一・七％）や「ふるさと納税などによる被災した地方公共団体への寄付」（一七・四％）、「NPOなどの団体への支援金の寄付」（一四・二％）等の回答も多かった。

【資料３】消防団の年齢階級別構成の推移

（各年4月1日現在）



（総務省消防庁「令和４年版 消防白書」より）

③このような支援活動は、広い意味での「共助」の取組であると捉えることができる。地域コミュニティによるつながりの低下が懸念されている中、このような取組を含めて、幅広い形での「共助」の取組を促していくような環境整備が求められている。

(内閣府 令和五年版『防災白書』より)
※出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある。

注 起震車：地震発生時の状況を擬似的に体験するための訓練用車両。

問一 傍線部①「国民の防災意識」に関する説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

解答番号は13。(5点)

- a 熊本地震後の自助の取組の実施率を見ると、いずれの取組についても、東日本大震災後の実施率の伸びよりも大きかった。
- b 阪神淡路大震災後、死者の死因よりも、避難所での物資不足の方が自助の取組に与えた影響が大きかったと考察されている。
- c 東日本大震災後、「食料や水の備蓄」以外の自助の取組の実施率は、前回調査よりも一〇ポイント以上上昇した。
- d 『防災白書』は自助の取組の実施率が阪神大震災以前において低い理由の一つを、災害体験の風化にあると見ている。
- e 平成時代中期に相次いで起きた地震によって、自助の取組は上昇していったが、東日本大震災後は伸びが頭打ちになった。

問二 空白部 **ア** に入る語として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は14。(3点)

- a そこ b しかし c いわば d ところで e ましてや

問三 傍線部②「一步を踏み出せない」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

解答番号は15。(4点)

- a やり方がわからない b きっかけを得られない c 必要性を感じていない
d 真似^{まね}がうまくいかない e 行動にとりかかれない

問四 空白部 **I** に入る語として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は16。(4点)

- a 性別 b 職業 c 年齢層 d 支持政党 e 天候

問五 空白部 **II** に入る言葉として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

解答番号は17。(4点)

- a 昭和四〇年には一〇〜三〇代が九〇・四%を占めていたが、令和四年には三九・三%まで減少しており
b 平成一〇年以降一九歳以下の団員割合は、男性団員において低率のまま横ばい状態にあり
c 平成二五年に至り、一〇〜三〇代と、それ以上の年齢層の団員割合が逆転するにいたっており
d 少子高齢化を反映し、比較的高年齢の入団者数が増加する一方、若年層の入団者数は減少傾向にあり
e などらかにその傾向は進行しているが、特に平成中期において団員の高齢化は一気に加速しており

問六 傍線部③「このような支援活動」に関する説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

解答番号は18。(5点)

- a 支援活動を通じて、地縁のある人々が共に助け合う仕組みを生み出すことができている。
 - b 支援活動を通じて、地縁に関係ない共同体との結びつきを強めることができている。
 - c 支援活動を通じて、人々が利害を度外視したコミュニティを形成することができている。
 - d 支援活動を通じて、地震に対する共通の危機意識を生み出すことができている。
 - e 支援活動を通じて、共通の問題を解決しようと人々が士気を上げることができている。
- 問七 本文で述べられている「自助」の例として、**あてはまらないもの**を次の中から一つ選びなさい。

解答番号は19。(5点)

- a 缶詰めやレトルト食品などの長期間保存できる食品を、日頃から自宅に常備している。
- b 自宅にある本棚やたんすを、金具や突っ張り棒を使って壁に固定した。
- c 公衆電話や災害伝言ダイヤル、インターネットの災害用伝言板の使い方を確認し、家族で共有した。
- d 被災地の災害ボランティアセンターに赴いて、ボランティアとして登録した。
- e 市町村のウェブサイトから防災マップをダウンロードして、避難場所を確認した。

次に示すのは、前に示した文章を読んだ後に、三人の生徒と教師が話し合っている場面である。

生徒A——【資料1】の二〇二二年の数値を見ると、「家族との連絡方法の確認」は、他の自助の取り組みよりかなり低いよ。

生徒B——家族との連絡はスマホ一つで簡単にできるという認識から、わざわざ確認しないのかもしれないね。で

も、災害時に通信障害などが発生する可能性を考えると、この取り組みは重要だと思うな。

生徒C——災害の後の二次災害への備えが重要だね。地震の後に火災が起きることがあるけど、消防団はこうした二次災害への備えにもなっているといえそうだな。

教師——令和六年に起きた能登半島地震では、焼失区域の面積は約五万平方メートルでしたが、消防活動がなければ倍以上になったかもしれないといわれていますね。

生徒C——消火活動以外にも、消防団はけが人の搬送や避難所の運営支援もしていると聞きました。

生徒A——災害発生時に大切な役割を果たしているんですね。だからこそ、【資料2】で示されている消防団員数の急激な減少が心配です。何か対策はされているんでしょうか？

教師——消防庁では消防団の振興のために、ウェブサイトなどで様々な情報発信をしているようです。しかし、情報が周知されているとはいえないかもしれません。たとえば、消防団の活動には、報酬があることは知っていますか？

生徒A——ボランティアだと思っていました。

教師——実は、消防団の活動に対し、多くの市町村では数万円程度の年額報酬が出ます。また、災害活動や訓練では一回あたり数千円程度の出動手当などが支給されます。

生徒B——どういう人が消防団に入れるのですか？

教師——各自治体の規定によりますが、基本的にその地域に住む十八歳以上の人なら、性別・年齢・職業に関係なく入れます。また、機能別団員制度という、平時の啓発活動や大規模災害時など、役割を限定して対応する制度もあります。

生徒C——【資料2】を見ると、**Ⅲ**、会社などに勤めながらも消防団活動に参加しやすい環境であることも、消防団の維持のためには重要だと思います。そうすれば、【資料3】で減少傾向にある二十代や三十代の消防団員の割合も増えるかもしれません。

問八 空白部 Ⅲ にあてはまるものとして、もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

解答番号は 20。 (5点)

- a 会社などに雇用されていない消防団員の比率が令和四年までの十五年以上七割を超えており、活動力
バー率も上昇しているので
 - b 会社などに雇用されていない消防団員の割合を示す被用者団員比率が、令和四年までの五年以上減少
し続けているので
 - c 会社などに雇用されている消防団員の比率が令和四年までの一〇年以上七割を超えており、自主防災
組織としての役割が大きいので
 - d 会社などに雇用されている消防団員の割合を示す被用者団員比率が、令和四年までの二〇年以上七割
を超えているので
 - e 会社などに雇用されている消防団員の比率と全体の消防団員数は反比例の傾向にあるなか、まずは被
用者団員として活動してほしいので
- 問九 四人の会話の内容と一致するものとして、もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。
- 解答番号は 21。 (5点)
- a 消防団の活動に報酬があることは、ウェブサイトを通じて周知されていると教師は認識している。
 - b 二〇二二年時点の自助の取り組みの状況から、二次災害対策への人々の意識の高さがうかがえる。
 - c 生徒 A は消防団員数が減り続け、令和元年以降は八〇万人を下回っている状況を懸念している。
 - d 災害発生時、消防団は消火活動以外の救護活動などの対応でも活躍している。
 - e 消防団が消火活動を行う火災は、地震の二次災害の場合であることが他に比べて多い。

三 次の問いに答えなさい。(各2点、計10点)

問一 次の傍線部に当たる漢字と同じものを、それぞれa～dの中から一つ選びなさい。

解答番号は(1)は22、(2)は23、(3)は24。

(1) 自転車にジュン滑油を塗る。

a 国民の所得水ジュンが上昇する。

c ジュン沢な資金がある。

b 二国間で条約を批ジュンする。
d 外国でジュン札の旅をする。

(2) 役所のチヨウ税を行う部署に勤める。

a チヨウ問客に対応する。

c チヨウ戒処分を受ける。

b 胃チヨウの調子が悪化する。
d 目立った特チヨウのない服装。

(3) 虫スイ炎を治療する。

a スイ事のために台所に立つ。

c 文明がスイ退する。

b 鉄棒で懸スイをする。
d 当初の目的を完スイする。

問二 次の傍線部の漢字と同じ読みものを、それぞれa～dの中から一つ選びなさい。

解答番号は(1)は25、(2)は26。

(1) 丹精込めて野菜を育てる。

a 武術の鍛錬を積む。

c 証明書を添付する。

b 文壇で名をはせる。
d だるま落としは慣性の法則の好例である。

(2) 政治家を弾劾する。

a 破壊と創造を繰り返す。

c 天蓋つきの寝台で眠る。

b 弟子に稽古をつける。
d 怠慢な態度をとがめる。

2026年（令和8年）度 一般入学試験B日程

国語 解答例

2026年3月3日実施

一

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
a	c	b	e	c	e	d	e	c	d	c	a

二

13	14	15	16	17	18	19	20	21
d	b	e	c	a	b	d	c	d

三

22	23	24	25	26
c	d	b	a	c